

大分大学派遣留学生支援制度（短期研修型）実施報告 （心臓血管外科学講座）

医学科 4 年次の研究室配属の一環として、アメリカのペンシルベニア大学に 4 年生 2 名が短期留学しました。
この留学は大分大学派遣留学支援制度(短期研修型)に採択され、実施されたものです。

医学科 4 年 木野裕磨さんの感想

（研修内容）

私は、ペンシルベニア大学 Gorman lab にて二ヶ月半の間再灌流心筋梗塞を T1pMRI を用いて評価する研究について学びました。そこで、研究者の方の横について説明を聞きながら見学したり、エコー画像から僧帽弁を描出する研究の解析にも参加させていただきました。

（成果）

私はこの研修を通じて多くの貴重な経験をさせていただきました。その一つとして、世界で最先端の研究室の設備や研究者の熱気に直に触れられた事が挙げられます。昨今、インターネットを通じて大抵の情報を得ることができる様になりました。しかし、実際現地に行ってみて体感してみると画面越しに見聞きすることには依然大きな差があります。実際に本物を体感すること、五感を通じた経験は私にとって大きな学びとなりました。

次に、アメリカという異国の地で数ヶ月もの間ほぼ英語のみで生活したことです。アメリカに渡航する前に英語をある程度身につけたつもりだったのですが、いざ到着してみると現地の人とコミュニケーションを取ろうとしても伝わらない理解できない、という状況にたくさん直面しました。専門用語が飛び交う研究室ではなおのことです。当初はそうした状況に悪戦苦闘していたのですが、毎日わからない言葉を一つ一つ調べて、聞こえなかった英語を何度も聞き直しているうちに最終的には円滑なコミュニケーションが取れるようになりました。慣れている環境から離れた国での生活は、ときに心身ともにたいへん負荷のかかることもありますが、そこに適応できるよう創意工夫した経験は私に自信を与えてくれました。

これらの経験は医学生の私にとって強い刺激となり、私を大きく成長させ、これから医師としてのキャリアを積んでいく上でかけがえのないものになったと確信しています。

医学科 4 年 桑野翔太さんの感想

（研究内容）

2019 年 4 月から 6 月までの 3 ヶ月間、米国ペンシルベニア大学 Gorman cardiovascular research group にて、「僧帽弁形成リングの柔軟性が縫合力に及ぼす影響」に関する研究に関わらせていただいた。

（成果）

本実習では、多岐に渡り貴重な経験を得ることが出来た。

研究に関しては、おそらく日本では関わる事が難しい内容に触れ、考え、ディスカッションすることが出来た。過去に日本での動物実験の経験がある私にとって、アメリカと日本での研究の違いについて驚くことも多々あったが、これもまた、自身主導で研究を実施する立場となった際におけるとても良い経験になったと思う。

また、アメリカで 3 ヶ月間生活できた経験は非常に大きな糧となった。英語未習得者の私にとって、アメリカで日常生活を送ること自体が大きな学習であったためである。日本語以外でコミュニケーションをとることの難しさを痛感したのと同時に、英語というツールを用いて世界中の人々の価値観に触れる面白さも発見することが出来た。それゆえに、学生の今だからこそ、医学と並行して英語を学び続けなければならないと、この身をもって感じ取ることが出来た。

さらに、国外から自国の医療を見ることができたのは、今後の国際化社会における自身のあるべき姿を考える良い機会となった。日本では、当然のように簡単かつ安価に受けられる医療が他国では全く状況が変わる状況をこの目で感じ取ることが出来たためである。近い将来、私が医師となった際には、必要な医療を提供することはもちろんであるが、一方で限られた医療資源をいかに有効に利用するか判断を行わなければならないという教訓を得たのも本実習のおかげであった。

本実習は、日本国外での研究の一端を学ぶことが出来たと同時に、将来の目指す医師像のブラッシュアップへの大きな一助となった。このような経験を、学生のうちに得ることが出来たことは、非常に幸運なことであり、この経験を現時点で完結させるのではなく、良医へなるために繋げられるよう今後も研鑽に努めたいと思う。

末筆となりましたが、このような貴重な機会を設けて下さった宮本教授を始めとします心臓血管外科学講座の先生方や、お世話になった方々に、この場をお借りして深く感謝を申し上げます。

